
ニガテを越えて

弥月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二ガテを越えて

【Nコード】

N9903S

【作者名】

弥月

【あらすじ】

友人に頼まれて私が苦手な彼に飲み会の誘いを申し込むことになり。

任務遂行のため誘ったのまではよかったのに……。

どうして今私は喫茶店で彼とお茶を飲んでいるのでしょうか？

誰か分かる人教えてください。

うん本気で！！！！

一様。ラブなコメを目指してみようと思います。
つたない文章かも知れませんが^^;
よろしく願います。

1話 誘い

駅近くのある小洒落た喫茶店。

中もレトロな雰囲気包まれてゆっくりとした時間が流れている。
本来なら落ち着けるはずの空間なのに、かなり気まずい空気が私の
気を重くする。

冷や汗がたらたらと流れるのを感じながら相手は相変わらず無表情。
友人の頼みを聞くんじゃないかなかったと思っても後の祭り……。

「里美お願い!!」

友人が珍しく声を張り上げて言うから何かと思えば話してみたい
人がいると、でもって今度の飲み会に誘ってきてほしいとの事。

彼女がこれ迄に誰かを誘うとか言ったことはあまりなく、人見知り
する彼女が言ってきたのだ。

どうした心境なのかわからないけど頼ってくれるのが嬉しくて快く
引き受けたが……。

まさか引き受け相手が私の苦手に思っていた伊達くんだ。
いつも無表情というか感情が読み取りにくい。

（私的にはだけど……）

なんとなく近寄りがたくて同じ学科なのに未だに話したことがない。でも友達の頼みなのだから叶えてあげないと！！っと意気込み。今日の講習が終わったときを狙って声をかけたのはいいものの。

伊達くんのお得意のポーカーフェイスで「何？」との一言に私は思わずたじろいだ。

（だって苦手なんだもん！！）

頭の中で言う決めていた言葉は、すっかり抜けてしまい。

あたふたしている私を見かねたのか「付いてきて」と言われ、今の喫茶店に案内されたのである。

そして今まさにコーヒーを飲んでいるという何とも可笑しい状況になつてます！！

未だに任務を今だ果たせてないし……。

伊達は優雅にコーヒー飲んでるけどな！！

（せっかく伊達くんがチャンスくれたんだから言わなきゃ！！）

握り拳を作り、気合を入れて腹を括ったとき、

「何で呼んだわけ？山野」

「えっあの……その……」

「はつきりしない奴だな。今日声かけてくれて嬉しかったのに」

先まで無表情だった彼が表情を和らいだ。

とうか、今伊達くんがはにかんだようにも思える。

（気のせいかな？）

でも先ほどまでの気まずさが和らいだ気がした。今なら言えそう。
私は目をちゃんと伊達くんに目を合わせて、

「ちょっと頼みというか……。お願いがあるの」

「何？」

「今週の週末に飲み会をやるんだけど伊達くん来てくれないかな？」

「……それって普通頼みとかじゃなくて誘いじゃないの？」

彼がきょんととして聞くから、自分の間違えに気付かされたけど慌てて、

「そっ！ー！そうなの！！誘い誘い。友達がどうしても伊達くんと飲みたいって」

「ふーん」

早口で言うつと伊達くんは興味なさそうに相づちをしてくれたがまた素っ気ない態度に戻ってしまった。

（何で！？）

戸惑う私に伊達くんが、

「……山野は来ないの？」

「えっわっ私!？」

「うん。山野」

なぜ私と更にどぎまぎしてしまった私に対して伊達くんはじっと私を見て動じていない。

なんて頑丈な仮面でも例えようか……。

私は冷や汗をかきながら、「もっともちろん行くよ」声が裏返りながら精一杯の笑顔と共に言った。

「……じゃ行く」

「本当!？ありがとう」

なぜ私が飲み会に参加するのか聞いてきたのは謎だが、とにかく来てくれることに安堵した。

やっと落ち着いてアイスミルクティーを飲む。

そうと決まればと鞆から手帳を取り出して友人に指定された時間と日程をページを開く。

週末の所に大きく赤丸と〴〵に集合と書かれていて、友人の必死さが伝わってくる。

（これ、美穂ちゃんに搔っ攫われてまで書かれたからよっぽど必死だっただろうな）

友人の必死さに思い出し笑いをしてしまいそうになりなんとか堪えた。

伊達くんには気づかれなかったみたいでセーフだったけど。

私はなるだけ冷静に伊達くんに伝えたと頷いてくれたので当日も大

丈夫だろう。

伝えることは伝えたのでほっとした。

緊張して今まで飲む余裕さえなかったために置いていたアイスミルクティーを口に含む。

だいぶ時間が経ってしまったためコップの結露が出来ているがまだ冷たく甘い味が広がる。

すっかり気を落ち着かせた私は後は帰るだけと思ったのに、急に伊達くんが何かを思い出したように隣に置いていた鞆をあさりはじめ。

探していた物が見つかったのか鞆から何かを取り出して私に、

「山野アド教えて」

「えっ」

「連絡取れないだろ。他のメンバー俺分らないんだし」

言われてみれば確かにそうだ。

私だってそこらへん友人から聞かされていない。必死に誘って来きてと言われたただけだ。

（失礼すぎたかな……）

思考がマイナスの方にしか浮かばなかったがなんとか振り切り、慌てて携帯を探す。

「そっそくだよね。気が利かなくてごめん」

「別に謝らなくても。それに気使わなくてもいいよ」

そう言われても相変わらず表情が読めない伊達くん。

私はどうすればいいか戸惑っていや落ち込んで、重い口が開くけども言葉は繋がらず、出ても「……でも」としか続けられない。

どこか気が重くてでも考えがまとまらなくて、小パニックを起こしそうになったときに、

「山野。そんなに気にしてたらハゲるんじゃないか」

「なあ！！だつ伊達くん！？」

「だからそんなに悩むことないじゃないか？ 同い年なのに」

抑えながらに笑う伊達くん。

でもはつきりと私に目を細めて綻んだ笑顔に驚きを隠せない。

私の体が一気に沸騰したように熱くなる。

悩んでいたことが恥ずかしくて、それに初めてみる笑顔にちょっとびっくりした。

だって爽やかに笑うから。私の中のイメージが変わった気がした。

（やっぱり、話してみないと人って分からないのね）

本当は話しやすい人なのかも……。

伊達くんの認識を改めていたが、まだ笑い続ける伊達くんの頬がほんのりと赤く染まっている。

確実私ほどではないけど私は頬がひりひりするぐらい熱を帯びているんだから、

きつと今鏡をみたら真っ赤なんだろうとそれはそれで恥ずかしい。

失態と苦手から早く開放されたいのにこういうときに限って探し

でも見つからない。
もしかして家に忘れてきたかな……。そういえば今日使った覚えないし。

「見つかった？」

「えっと……。家に忘れてきたみたいです」

「そう」

その一言を伊達くんが言うとテーブルの上にあったアンケート用紙のボールペン取り、
私の手帳が目に入ったのかメモの所あるよね？と聞かれたので素直にそのページを開いて伊達くんに渡した。

なんだろうかと私は首を捻ったが伊達くんは何かを書き始めた。
さらさらと書きすぐに手帳を返してくれた。

目線を手帳に移すと、名前と電話番号、メールアドレスが書かれていた。

しかも綺麗な字でちよつと悔しい。

手帳を睨みつけていたら、伊達くんと呼ばれて顔を上げたら立ち上がって鞆を背負っていた。

ただ不自然に何かを堪えてる顔をしたけど……。
何だろうと思いが空転しそうになったとき。

「ここに連絡して」

「えっあつわかった」

慌てて現実に戻ってなるだけ自然を装って返答した。
伊達くんは微笑んで（私が見えただけかもしれないけど）、

「じゃ俺先に出るよ。山野は気をつけて帰えろよ」

「うん。ありがとう」

このとき伊達くんにつられて自然に笑顔が出来たのは自分にとってちょっと驚きだけど、
苦手加減がちょっとくらいは軽減されたのかなと思うとうれしいな。

伊達くんの背中を見送って、後はゆっくりアイスミルクティーを飲み干した。

後ほどあることに気がつく。出来れば見送るときにに気づけばよかったんだ。

まさか伊達くんに伝票を取られていたなんて思いもしなかったから……。

なんて紳士!!

店員さんからは微笑ましく見られたような気がするし。いやカンベンしてください。

軽減したって言うっても苦手には変わらないのよ!!!!!!

(今度会ったら絶対お金返さなきゃ)

心に誓い。喫茶店を後にした。

今週末私は果たして生きていられるのだろうか。
不安だけが募ったのは言うまでもない。

2話　ありえない！？

重い足で家に着いた。なんかやけに疲れた気がする。

家に入ると、私以外にまだ帰ってきていないみたいだ。お母さんもない。

まあいつものことなただけど。

自分の部屋に行き、肩にかけていた鞆を下ろす。

まだ日があるためにオレンジ色の夕日が窓から差し込む。

白で統一されている部屋なため綺麗にオレンジ色に染まっていた。この年になるとぬいぐるみなど、興味がなくなってしまったのでつい最近整理したら、なんか女子の部屋ではないような。よく言えばすっきりした部屋。悪く言えば殺風景な印象を与える部屋になってしまったがこれはこれで落ち着くので私は気にしない。

いつものようにベッドに腰掛けると枕の隣に携帯が置いてあった。

「やっぱり忘れてた」

見ると着信が三件入っていた。

携帯を開き、見ると“五嶋美穂”とディスプレイに表示されていた。この人物こそが、私にお願いしてきた友人だ。

この友人が伊達くんと飲んでみたいと言わなければ、関わらずにすんだのにとため息をひとつこぼす。があんなに必死に頼まれれば引き受ける他はない。

なんせ美穂ちゃんは可愛い。

大人しくて人見知り激しいけど黒髪の綺麗なロングヘアは、私も羨ましいくらい綺麗で、まるでお人形さんみたいなのだ。

それを本人に言うとうムキになって反発するところなんか、なおのと可愛い。

つついとお節介を焼いてしまふ。

私がとても可愛がつている子なのだ。

だからはなつから断れないことは重々承知していた事なのだから仕方ないことだ。

だが、なぜ着信があるのだろうと思いかけ直してみる。

トゥルルルルル……。

トゥルルルルル……。

と何度かコール音をして「もしもし」声が耳に届いた。

「美穂ちゃん。私、里美だよ」

「よかった。里美ちゃん電話かけても繋がらないんだもん。心配しちゃった」

「ごめん。携帯家に忘れちゃってさ。ところでどうしたの？何かあった？」

「えつとね。伊達くんの件が気になっちゃって……。どうだった？」

ああやっぱりそうですよね。

私は心で大いに頷いた。

だって私も同じ立場だったらきつと同じ行動してるもん。

そう思うと笑みがこぼれた。

「大丈夫だよ。伊達くん来てくれるって」

「本当！？よかった」

美穂ちゃんの喜んだ声が聞こえてなんだか私もうれしくなる。

頑張った甲斐があつたなつとばかりに、あとは当日だけ我慢すればいい話だし気を楽に考えていた。が連絡を取ることを思い出してちよつと気が重くなつたのは置いて。

「私も聞きたいことあつたの。飲み会のメンバーなんだけど」

「あつごめんね。伝えてなかったね。伊達くんが来てくれるって確定したから4人よ」

「ありがとう」

「あつあのね里美ちゃん。ちよつと言いつらいけど……」

喜んだ美穂ちゃんの声が、ちよつと曇った気がしたが、どうしたんだろうと思つた。

何かと思つて聞き返してみれば、

「実はね。私の連れがどうしても遊園地行きたいって聞かなくて場所を変更したんだけど」

「へっ?」

「いいよね?早めに切り上げてから飲み会つてことになつてるからそのこと伊達くんに伝えてほしいんだけど里美ちゃんお願いできるかな」

急な事に頭が動転した。まさかの予定変更……。

でも電話から聞こえる声はなんだか弱々しくて、きつと電話の向こうで眉をへの字にして困っているのだろう。その姿を想像して思い浮かべてしまうと益々断れない。

寧ろ何でも任せてとでも言ってしまいそうになるくらいの効果をもっているのだ。

よくよく考えると……。

……やっぱり怖いので深くは考えない事にするけども。

どうせ連絡を取らなければ、ならなかったので気が乗らないけど引き受けた。

「ありがとう。じゃ場所は新宿駅に10時に集合でよろしくね」

「うん。わかった」

近くにあった紙に言われた通りにメモを残すと、美穂ちゃんに呼ばれて「うん？」と聞き返してみればふふと笑い声が聞こえたあとに

「うーんと可愛くしてきてね！！あと絶対スカートは履いてくるんだよー！！」

「えっそれどう「絶対だよ」ちょっ美穂！！」

どういう意味かわからないまま通話が切れてしまった。

（どういう意味なの！！普通は美穂ちゃんが目立たなきゃいけない何故私も！？）

ぐるぐると思考が空転してしまう。

考えても出てこないのは始めからわかっていた。

もういいやと思ってベットに倒れ込んだ。

片手に掴んだまんまの携帯。

まず登録から始めないとなあ。

せっかくの横になつたのに、手帳が鞆の中に有ることに気が付く。取り行くのはめんどくさいが、嫌なことは早く終わらせた方が気が楽なはずと、重い腰を上げて立ち上がって鞆を持ち上げる。

ベット付近に鞆を置き手帳を出す。

まただらりと横になりながらメモされたページを開くと綺麗に書かれた連絡先が目に入る。

（本当に達筆だわ）。習字でも習つてたのかな伊達くん）

どうでもいいことを思いながら携帯のアドレス帳を押して淡々と入力する。

だが問題はここからだ。

本来ならメンバーだけを伝えれば済む話だったのに、遊園地も行くことになつたことを言わなければいけない。

美穂ちゃんのお連れさんが余計なことをしなければ、こんなことは……って言つてもしかたない。けどどうしても文句の一つも言いたくなる。

止まらないため息をまた吐いて頭の中で文章を考えていたらアドレス帳の登録を終えた。

いよいよ腹を決めて連絡をとろうとして携帯を握る。が持ったまま動けない。いや動けない。まだ夕方の時間だし、焦ることもないのだが……。

どうにも行動が移せない。だたボタン１つ押せばいいだけなのに。

ああ情けない自分。

そこまで苦手意識があつたのかと別の意味で笑いがこみ上げるが声としては出なかった。

出てもたぶん空笑いだけど。

やっぱ始めはメールかな。

きつと電話しても大丈夫だろうが私の連絡先を覚えていないので出

ない可能性もあるし、忙しかったら困るのは伊達くんだもんね。などと理由をつけてメールで連絡取るようにした。

これなら大丈夫だろうと思って簡潔に終わるはずだし！とさっそくメール画面を開く。

メールの用件の所に山野ですと自分の名前を載せ。

用件に

『こんばんは　山野です。

早速メールさせて頂きました。

登録お願いします。』

と書き込んだ後に連絡先を入力した。

（あとは遊園地の件ね）

文章を考えるのはすごく時間がかかったがなんとかまとまって、

『えつと大変申し訳ありませんが集合時間と場所が変わりました。新宿駅に10時になりました。

理由は遊園地に行くことになりました。もちろん飲み会もあります。

ちなみにメンバーは私の友達とその連れと私と伊達くんなので4人です。

何かありましたら連絡ください』

と連絡先の下に加えて伊達くんにメールした。

メールしてしまえばこっちのмонで、あとは待てばいい。

ベットのの上ということもあってか夕飯前だが眠くなってきた。

軽くだが寝てしまおう。

どうせ夕飯は8時だしと私はまぶたを閉じて眠りについてしまった。

チャラララーラーラッラララチャラチャラー

と機械音が私の眠りを邪魔をする。

無視をしようと思ったが鳴り止まない。

私に電話する人なんて早々いないし、そういえば留守電設定を切っていたような気がする。

寝起き眼で携帯を探し出し、訛った声で「もしもし」と出てしまった。

このときによく考えていれば分かったはずだった。
電話の主が彼だったことに……。

3話 お電話ですよ

なんか聞き覚えのある声が聞こえる。

うゝん誰だっけ？寝起きせいか頭がぼーとする。

もう一眠りしたいが本音だが。

欲求には人は勝てないもんねっとまた瞼がとじかけようとしたとき

「山野」って声が聞こえた。

どこからっと思っていたら自分が持つてる四角い薄っぺらい機械からだ。

その機械から男の人の声で私のこと呼んでる？ような……。はて？
山野って呼び捨てにする人は確か。

……。伊達くんくらいしかないなあ……。。

（うん？……。ってあの伊達！？）

ぼーとしていた頭が一瞬で冴えてベットから勢いよく飛び起きた。
がベットの端にいたのに気づかず、支えていた手がずりりと滑って
ドンと大きな音をたてて落ちた。
声にならない痛さに悶絶しながらも電話を取る。

「いっゝゝ。あつもしもし？」

「山野！！大丈夫か？なんかすごい音が聞こえてきたけど」

「ああ大丈夫！大丈夫！気にしないで！！」

恥ずかしさに体が熱くなる。心臓も飛び出るくらいバクバクと音を
たててうるさいくらいだ。

（ヤバい！！まじでテンパった。よくわからないけどなんで今電話してくるわけ！！）

頭が混乱して事態の収集が掴めない。

動き始めた脳で必死にフル回転してみるものの「えっと」「や」「その」などを口にして空気に消けてしまう。

全く意味をなさない。

（どうしよう。言葉繋がらない）

伊達くんは気を察したのか、

「もしかして忙しいときに連絡入れちゃったか？ダメならまたかけ直すけど？」

「いやいや！！大丈夫よ！！ちょっとびっくりしただけだから。あはは」

伊達くんのなんとか気をそらせたいくて笑ってごまかした。のにかかわらず心配そうな声で「本当だな？」と確認してくるあたり律儀な人だなっと思った。

もつと堅物な感じなのかと思ってたから、人って関わってみないとわからないなあっと痛感する。

でも何故そこまで気を使ってもらえるか私的には謎だったが。とりあえずいい人って事でその疑問を抑えた。

「山野？」

また上の空になりかけたときに伊達くんの声が聞こえてくる。

（って考えてる場合ではないよ！！）

私は息を調べてから、「うん。大丈夫」と答えた。
あの間が怪しまれなきゃいいけど。

「よかった」

向こうから安堵の声が耳を通る。

よく考えれば伊達くんも意外に緊張してたのかなと今更思う。
電話って友達でも緊張するときもあるし、今回は初めて電話する相手だから尚更するはず。だから丁寧だったのかと自分的に納得した。

「山野。場所変更ってメールで読んだが」

「その……。友達のお連れさんがどうしても行きたいから一緒に行こうかみたいな話になっちゃったの」

「そう」

伊達くんが頷いたあとわずかだが沈黙が流れた。たぶんわずかだった。だが気まずい空気が耐え切れずつい、

「やっぱりだめだった？」

「いやそういうわけじゃないけど。その……。やっぱりなんでもない。大丈夫行けるから」

「そう。よかった」

一様安堵した。

これで行けないと言われたら美穂ちゃんを悲しませることになるんだもん。それは避けたい。

「ところで待ち合わせだけど。新宿駅だよな？」

「うん、そうだよ」

「山野たしか最寄り駅は本厚木だったよな」

「えっそうだけど。それがどうしたの？」

変な質問してくるなと思った。私の最寄り駅なんかどうでもいいではないか。

なんかいやな予感がする。直感的に感じた。（私的にだけど）

でもどうせ私が聞いても、聞かなくても同じだろうからあえて聞いてみたが。

「駅同じだから一緒に行かないか？」

「えっ」

思わず、上擦った声を上げてしまう。

口元も引きつってしまった。これがまだ電話でよかったと安堵しつつ。

絶対あの喫茶店でこの話していたら洒落にならないくらい失礼な表情をしていただろう。

鏡がないが自分がひどい顔をしていることは容易にわかるくらいなのだから。

どう断ろうか、又は引き受けるとしてもどうしようか悩んでいると、

「いやか？」

電話から伊達くんの声のトーンが下がる。

自分が曖昧すぎたために相手を不安にさせてしまったみたいだ。
自分の失態に気づいて私は急いで、

「そっそんなことないよ！！大丈夫だよ」

声を張り上げて言った。煩いくらいに。

自分が相手側だったら耳を押さえそうなほどだったと思う。
すると吹くような笑い声が耳に入る。

「そんなに慌てなくても。でもよかった。じゃ9時に本厚木のホームで」

爽やかに笑う声がなんだかむず痒く感じる。

でも伊達くんを安心させられたみたいだ。一様……。
ほっと胸を撫で下ろして、

「うん、わかった」

私は頷いた。

場所と時間が決まればすぐに電話は終わった。

週末まであと数日。

あとは私がどう乗り切るか。来てほしくないが願ったところで時間は止まることはないのだからどうせならドンと構えていよう私は心に強く想って決めた。

4話 待ち合わせ

今私は駅のホームにいます。何故って？私だって聞きたい。今日、まだ遊園地や、飲み会はまだ耐えられますよ。

でもなんで私が苦手とする人と、一緒に待ち合わせの場所まで、行かなければいけないのでしょうか。

あつまあ多少の関わりで極小ですが、前よりはましになったかもしれないけど……。

大事なことからもう一度。

極小ですよ！極小！！

うな垂れながら腕時計を見ると、約束の時間まであと5分。

ホームにはある程度人がいるので新宿に向かうのは少々憂鬱だ。

だってこの時間帯は確実に込むことは容易に予測できる。

特に途中駅では路線が繋がっているため、人の乗り降りが激しい所があるし、新宿が最終着駅ってことで巻き込まれることは確実なのだ。

せめて押しつぶされないことを願うのみ。

「そろそろかな……」

辺りを見回し伊達くんの人物を探すと、それらしい人を発見した。階段から降りてくる青年。見覚えのある黒髪短髪とその高めの身長。しかしまだこちらに気づいてないのか辺りを見回しているようだ。今日の格好はラフな感じで決めてきているみたいだ。

伊達くんの格好を具体的に言うと、白のTシャツに紺色パーカーを羽織りブラウンのカーゴパンツだろうか。

いまいちファッションに興味ない私には、よく分からんがよく似合ってると思うよ。

なんて少し観察していたら、伊達さんと目が合ってしまった。
するとこっちに來て「よう」という声と共にぶっきらばうに挨拶する伊達さんの姿だった。

「おはよう」

不自然かもしれないけど、微笑んで答えておいた。

THE・営業スマイルって事で。

喫茶店のときや電話のときと比べるとなんだか違和感を覚える。

（なんか素っ気ない感じだな）

別に構われない訳じゃないからいいんだけど。

「……山野。なんか普段と違うな」

「そっそうかな」

笑って誤魔化する。

そう珍しくオシャレをしてきた私。

普段はパンツものが多く、まして講義があるときは履いて行かない。
スカートも好きだが自分が履くとなると別だ。

寧ろ友達とかの方が似合っているし、今更スカートを履くってことに抵抗がある。

その私が減多に履かないスカートを今現在着用しているのだ。
ワンピースだけど。

レースなどのフリフリ系を抑えた袖口と、スカートの裾に花柄の刺繍が施されている白いワンピース。

でも生足は見せない主義なのでレギンスと履き、普段ストレートにしていた髪もポニーテールに結ってきた。

（これで美穂ちゃんウケは間違えない！！）

そう確信して今日家を出てきたのだ。

思わずガッツポーズを作りたくなるほどの完成度。
褒めたいぞ自分などと思っていたら、

「山野。顔変だぞ」

「えっ！？」

ぱっと手で顔を覆い隠す。

どうやら緩んだ表情が顔に出ていたらしい。

わああ私、痛い子だ。

ガックシッと落ち込みざる負えなかった。

だが微かだが耳に、

「……そついうのも……な」

「えっ」

そつと言われた言葉は私に届くことはなくて、ただ顔を上げさせた。
そのときに急にぎゅっと手を握られて。

「山野。電車が着た。乗ろう」

言われたとたんに駆け込むように電車に飛び込んだ。

手が熱い気がする。伊達くんの体温が高いのか？

伊達くんがなんかさつき言いかけたことが気になったが……。

それよりもいつの間に電車が駅に着ていたのか気付かなかった。

どれほど自分が妄想に浸っていたか。うん、笑えない。

走り出した電車は外の景色を瞬く間に通りすぎていく。

車内はまだわりと空いていたが、座席は空いていない。

新宿まで快速でも10駅以上先。ドア付近は混んでくると思っのでやはり中にいた方が利口だろう。

真ん中に入りつり革を掴もう思ったがまだ手を繋いでるままということに気が付いた。

「……あの伊達くん」

「あつごつごめん」

ぱつと離す手。

伊達くんの顔を見ればほのかに赤くなっているようだ。

「大丈夫だよ」

えへつと笑ってみせかけて、握られていた手をそつと自分の腕を掴んで比べてみたが私の手は平温のようだ。ということはやはり伊達くんが熱かったのか。

（もしかして伊達くん気が動転してかな。なーんてね）

ちらつと覗き見ればまだほのかに赤い頬が目立つ目に映る。

手を繋ぐことがそんなに恥ずかしかったんだろうか？

見てばかりは失礼だから流れる景色に視線をずらしたが沈黙が続く。きつ気まずいなもう！！

なんか話すにも話題は ってないな。

思考を巡らせたがこれっぽっちもない。

だってよく知らないし同じ学科ってただかもん。

「あの……さつきはその……すまん」

どうしようかつと考えていたら伊達くんが言ってきた。

私は一瞬ばかんとしてしまったが恐らく手を握ったことだろう。ばつが悪そうなでも照れも入ってるような困り顔をしている。

なんだか美穂ちゃんが困ったときの顔によく似ていた。

思わず見ていて可愛いかななどと思ってしまいくすつと笑いそうになる。

「もう。気にしてないのに」

そうかつと伊達くんは苦笑をしていた。

「伊達くんって遊園地の絶叫系って平気なの？」

「えっ」

「私、あんまり得意じゃないから。伊達くんはどう？」

「俺はわりと平気かな」

ふつと柔らかい笑顔が目を惹かれた。
なぜか分からないけど。

「平気か！羨ましい〜。内臓浮くふわあって感覚が無理なんだよね」

「そっか。あの感覚は人によるからな」

「そうなんだよ。あれが平気なの私信じられないもん!!」

過去に乗った記憶を辿りながら力説する。

スピードはまだしも、あの回転はアリエナイ。。

だってあんな高い所から落ちて上がってまた落ちる。

重力に反して内臓が浮くんですよ!!

誰が考えたアクティビティーだって叫びたくもなるさ。

すると、隣からくすくすつと笑う声が聞こえてきた。

見ると伊達くんが口元に手を当てて笑っている。

「ちょっと伊達くん今笑うところ違うよ!!」

「あははっだって山野。表情がころころ変わるから」

「そっそんなことないよ!私はいたって普通!」

「そうかな?さっき青くなったと思ったら、握りこぶし作って真っ赤になってたけど」

どう?って言う風に伊達くんの視線が刺さるようだ。

そっ視線で訴えられても……。

今更、違うとは答えづらい。確かに思い返してみればやっていたような気もするから。

笑い声がやんだ。やっと収まったのかと、伊達くんの方を向けばまだ笑みは残っていた。

「楽しみだな」

「えっ?」

「遊園地。中学生以来だから」

「意外！高校は行かなかった。マウスランドとか有名でしょ？」

「うちの学校そういうのなかったなあ。あってもなんか水族館だったし」

そっかなどと相槌を打っていたが、淡々だけど楽しそうに高校の話とか伊達くんは語ってくれた。

私もつい他愛も無い話で夢中になってしまったが、意外に気兼ねなくなすことが出来たことにちよつと安心した。

途中駅で人の乗り降りも激しくもあつたが、予想してたほど、ぎゅうぎゅうというわけでもなく。スペースを保ちながら、無事に新宿に着くことができた。

時刻は9時50分を指している。

「改札だっけ」

「うん」

私は大きく頷いた。

まだ待ち合わせ時間には余裕だ。

だが早く美穂ちゃんに会いたいからさっさと合流場所に足を向ける。改札口で待ち合わせになっていたので目と鼻の先。

私はるるん気分で待っていたのに。。。

10分後

何故でしょうか？

一向に現れないのは……。

ここからが泣きなくなる時間の始まりだったかもしれない。

5話 新宿

待ち人はまだ来ない。二人はまだ改札口に立っていた。

「来ないな」

「……そうだね」

伊達くんとこの会話はすでに3回目だ。

お互い苦笑する。

最初の頃よりは、嫌な空気がしないのでホツとしつつ、行き交う人々を見ながら待ち人を探すが、それらしい人物は見当たらない。携帯を眺めても返事は来ないまま。

（まさか待ち合わせ場所を間違えたなんてことないよね……）

不安な思考が過ったから。

電話をしてみると『現在電源が切れているのか、
ナウンスがながれて全く役に立たないし。とりあえずメールを送
っておいたが……』

果たして見てくれるだろうか。

伊達くんに気付かれないようにため息を吐いた。

「なあ山野。もう一人って誰が来るんだ？」

「えっああ違う学科の男子で田辺くんって言ってたかな」

突然の話題にたどたどしくなってしまったが、確かに気にならなくもない。

私も詳しくは美穂ちゃんに聞かされていないから。

でもなぜか伊達くんは名前を聞くなり考え始め「そうか……」って呟いてからは黙ってしまうし。

どうしたもんかと困っていたら、着メロと共にバイブレーターの震えが手に伝う。

急いで取り次ぐと

『里美ちゃんごめんね!!』

凄まじき大音量が耳を襲った。

痛む耳を押さえながら、もう片方の耳で聞く。

どうやらパニックになっているようで、なんとか美穂ちゃんを落ち着かせるように、ゆっくりと優しく問いかけた。

「美穂ちゃん大丈夫だから。ねえ？」

『ああ……。うん、取り乱してごめんね』

やっといつもの美穂ちゃんに戻ったのでよかった。

その後、事情を聞くと、携帯の電池を充電する事を忘れていたせいで、電源が落ちてしまい。連絡が取れなかったことを美穂ちゃんは深く謝っていた。

『本当にごめんね』

「大丈夫!!大丈夫!!」

『ありがとう』

「いえいえ。あつ今どこいるの？」

早く合流したいがために、私はさりげなく美穂ちゃんに聞いた。

『今？新宿のあのねえＪＲ線の１６番ホームにいるのから……つきや』

「どうしたの!？」

何故か美穂ちゃんの声が途絶え、私が叫んだときにすぐ男性の声が聞こえてきた。

『ごめんね山野さん。電車きたから先に乗ってちゃった』

あははつと笑う声まで携帯は漏らさず伝えてくれた。
なんかイラツとする。がぐつと堪えて、

「……あのどちら様ですか？」

まず知らない相手だから聞いてみた。
相手を知るのは大事だし、それに私を知ってるってことは一応は関係者だろう。

『あれ？聞いてない？俺、田辺大和』

「ああ……参加者ですね。存じております」

つい片言で喋りそうになった。

だってこの数回の会話だが、何となくチャラさを感じるし、まとも
に会話しても疲れるだけな気がした。

「それより。美穂ちゃんは無事なんですよね？」

『山野くさん冷たい。それに固いし、もっとポップにこうよ！』

「……田辺さん」

『頑固だなく。みほりんは大丈夫。隣いるよ』

悪びれない様子で言うてくる声がどうも私の勘に触る。

美穂ちゃん心配だし！！つか！！みほりんってなにさ！！！！

なんでこんな男と……。

ため息を吐きそうになったのを堪えた。

電話の向こうで田辺くんの笑い声が聞こえる。

『そうそう。山野さん悪いけど、電車乗っちゃったからもう現地集合でいいよね？』

「はあ！？」

『じゃ電車の中なんでそろそろ失礼 伊達くんによろしく』

「ちょっと待つー！！」

無情にも電話は切れて、プップーと切れた音が耳に残るだけだ。しかも隣には心配そうに見守る伊達くんの姿。

なんだが朝から前途多難だな。落ち込みたくなる。

（ああ。もう帰ってもいいかな）

遠目で見つめてしまいたくなるほど。

今から会いに行く相手にまず会いたくないし、会いたくないし。大事だからここも2回言ってしまったけど。

そして……。

確実に田辺は自己中だ！！

感じるぞひしひしと！！

（そんな魔の手に美穂ちゃんを渡すもんか！？）

切られた携帯を握り、決意する。

隣にからちゅんちゅんと肩を叩かれた。

首を向けると、苦笑している伊達さんの姿。

「山野。何があったかわからないけど、今は五嶋さんの所に向かったほうがいいな」

「あつうん。そうだね」

頷いて、JRの駅の改札に向かう。

だが数歩歩いて疑問に思った。

（私伊達くんに話してないのにどうしてわかたんだろ？）

隣を歩く彼を見れば、いつもどりの顔だ。

それにさっきなぜ笑っていたのかも気になる。

どう聞き出そうか考えていると、伊達くんから話しかけてきた。

「さっきの電話の相手って田辺大和って言わなかったか？」

「うん。確かにその名前だったけど。田辺くんがどうしたの？」

そう返事すれば、また伊達くんは黙り込んでしまって、疑問を聞くところではなくなってしまった。

今は電車に乗り、次の駅で遊園地に着く。

天気は晴天なのに近づく度に気が重くなる。

電車の窓を眺めながら、私は面倒事に巻き込まれないように祈るばかりでした。

6話 集合

やはり遊園地の最寄りだけあって人通りが激しい。

はぐれないように伊達君の後ろを追いかける。

駅を出ると、広い場所に出て、噴水が目に入る。その右手側から人の並みは綺麗に一ヶ所を目指している。

「こっちなな」

「うん」

私は頷き足を進め、ちよつとした登り坂、歩道は綺麗でさくさく登る。

上りきろうとしたあたりで看板に目が止まる。

遊園地の看板で、でかかど書かれた文字と可愛いキャラクター
「うーにゃん」と「みーにゃん」がいる。

このキャラクターのモチーフは語尾からわかるようにネコだ。

うーにゃんは黒ネコ、みーにゃんが白ネコと子供に人気のマスコットキャラ。

ネコ好きの私にも堪らない。

漫画のふきだしのようにセリフが書かれて『どきどきにやわくわく
にゃ 君を夢の世界に連れててあげるにゃ！入り口はもうすぐになゃ

』 うーにゃん、みーにゃんが言っている。

こっちが入り口大きく矢印とともに地図も載っていた。

歩けばすぐ着くようで皆が向かっている道だ。

なにを隠そう、今日の唯一の楽しみはうーにゃんとみーにゃんに
会うこと。

アトラクションも楽しみだが、何よりも出会いたいキャラクター。

マウスランドのミツキリンも好きだが、可愛さはこっちだって負けていない。

群がる人を押しのけてでも写真を撮りたいくらいだから。

もちろんカメラは必須アイテムで、いつでも取り出せるように入れた位置を把握している。

「山野？」

「あつごめん」

自分の足が止まっていたことに気づき、伊達くんところに駆け寄る。

看板だけでもちよつとだけテーションが上がった。

看板を横切り、入り口を急ぐ。

目的の遊園地『にゃんランド』に着いた。

入り口の門には、『wonderful word』と書かれていて、続々と人が入っていく。

その門の端に入園チケットの販売している。

たぶん入園してから会うのは難しいから、入り口手前くらいに美穂ちゃんがいるだろう。

たぶんだけど……あの田辺が変なことさえしなければの話だが。

すでに昼近くとあって、チケット売り場はそんなに混んでいない。広いスペースで販売しているから効率がいいのだろう。とりあえず、チケットだけは買っておこうと並ぶ。

その間に連絡をばちちつと打つ。がスルスル前が進みあつという間にチケットが買えた。

ちようどよくちゃらららーと携帯のメールが受信する。

「きたか？」

「うん、それっぽい。えっと……。やっぱり入園はしてるけど、入場口で待つてゐるって」

「じゃ急ぐか」

「うん」

頷いて、入り口に向かう。

門を潜ると、可愛らしい音楽が耳に入る。近くでパレードをやっているのだろうか。

目に入るのは綺麗に整備された花壇と植木。

そしてもう少しさきにはメリーゴーランドが楽しそうに回っている。

きゃーきゃーと騒ぐ子供たちの声も聞こえと、楽しい音楽。

遊園地はやっぱり楽しくいかなきゃと改めて思った。

「あー！里美ちゃんこっち！」

「あつ美穂ちゃん！！」

呼ばれた方に振り向けば、なんとも可愛い格好の美穂ちゃん。

髪は団子に結ばれており、後ろからみたらうなじが綺麗そう。

あと軽く化粧をしているみたいでなんともときめくし、淡い緑色でレースを抑えたトップスにデニムのパンツだ。

……パンツ？って！ダッシュで駆け寄り美穂ちゃんの二度腕を掴んで、

「なんでパンツなの！？スカートじゃないの！？」

「えー。私はパンツがよかったからかな」

てへって笑う。美穂ちゃんは可愛いがそんな悠長に構ってられない。

だって私は言うとおりにしてきたんだから、美穂ちゃんもって思っていたのに。

「気分ですか！！気分でパンツですか！！！！」

「うん。そうだよ。里美ちゃん可愛い合格！」

「マジかマジなのか！！だったら私もパンツがよかったよ！！今から着替えてk」

ぽんつと頭を叩かれた。何かと思って振り向くと、伊達くん。

「ちょっとは、落ち着け」

「あ……。ごめん」

パニックっていた感情がちょっと治まる。

そしてくすくすつと笑う声が聞こえ、見ると美穂ちゃんが笑っている。

「そのままでもいいじゃない可愛いよ里美ちゃん」

「でも……」

「似合うからこのままでいてよ。ね？」

「……わかった」

むすつと言ったが、やっぱり美穂ちゃんの笑顔には弱いから、頷いてしまう。

ちらつと伊達くんを見たら、なにやら固まっているようだ。

目線の先を追うと、どうやら彼が田辺君だろう。

髪を明るめに染めてそうなイメージだったチャラ男さん。でもこうして姿を捉えるとイメージが違う。

暗めの茶髪で、気にして見なければ、黒に見える。意外にも短髪だ。しいて言うなら伊達くんよりは長いけど。

細めのフレームのメガネを付けていて、あんな自己中じゃなければ、けっこうイケメンな分類に入るかもしれない。

でもなぜか伊達くんは見つめ続けている。

そんな非常識な彼を、伊達くんはなぜここまで、気にするのか私は正直わからなかった。

ポーカーフェイスだから正直読めないけどね。

美穂ちゃんはそのような伊達くんに気づいたのか、はたまた気づいてないのか……。

固まっているにも関わらず声をかけた。

「初めまして伊達くん」

「あー……どうも。えつと五嶋さんだっけ」

「うん。本名は五嶋美穂。今日はありがとう来てくれて」

「いや、お礼言われるほどじゃないと思うが」

「いいの、いいの。嬉しいから、でっこっちが……」

美穂ちゃんが言い終わる前に、事の自体が起きた。

で隣いた田辺くんが伊達くんを抱きついている。

突然の行為で、目を見張る。

「会いたかったぜ！真人」

「ちよっ離せ！！大和！！」

必死にもがいてるあたり、きついのだろうか。

遊園地まで来て、なぜこれを見せられなきゃいけないだろう……。

でもなんとなく、さっき伊達くんが固まっていたわけがわかった気がする。

こいつと知り合いだったわけか。

「田辺さん。伊達くん苦しそうですよ」

助け舟ってわけではないけど、ここままだと話が進まなそうだから、あえてつつこんでおこう。

「えっ本当さとみちゃん」

「さとみちゃん！？」

引きつりそうになりました。

まさか、まさかの田辺くんからそんな言葉を言われるなんてショック。

どんだけフレンドリーなんだ。あんたはっといライラがまた募る。

「えっまあそうです。だから伊達くんを放して下さい」

「うーん。わかった」

そう言う田辺くんはとすぐに伊達くんを開放した。
ぐったりした様子の伊達くん。まだ遊園地に着いたばかりなのに、
この惨状。

やっぱり関わりたくない人物だと改めて認識して、
でも一様はメンバーだから、何者かだけは聞いておこう。

「で、田辺くんは伊達くんと知り合いなんですか？」

「えっ知り合いもなにも親友だけど」

「違っただろ！ただの腐れ縁だ。高校の時から！！」

「それを人は友とよ」呼ばねえよ！！」「ぶ」

ものすごい切れ味で、つつこむ伊達くん。
そしてなぜどや顔してる田辺くん。

「えー親友だろ！こんなに好いてるのに」

「きもい、近づくな、帰れ」

「もうイ・ケ・ズ（ハート）」

どす黒いオーラで、叩ききってる。ここまで感情を引き出せること
が出来るなんてすごいけど。
そんなことめげない田辺くんは可愛らしくぶりっ子ポーズまで決
めている。

恐ろしいわこの子！！

こんな戯言している間に刻々と時間が過ぎていく。

「……そろそろ黙れ。大和くん」

「えっ」

今まで黙っていた美穂ちゃんが、今まで聞いたこと無い低い声で、田辺くんを暴走を止めた。

言うか、この場をいた誰もが耳を疑ったが、変わらない笑顔と可愛らしい声で、

「もう遊園地に来たんだから、乗り物乗らないと勿体無いじゃない」

「そっそっだね」

「たしかに」

「うん」

「じゃ自己紹介も済んだし、さっさと行きましょう」

軽やかに歩く彼女のステップ。

みんなさっきの声は……と躊躇するしかなかった。

6話 集合（後書き）

遊園地については妄想です。

行き方についても、割合でたらめです。小田急の厚木から新宿まではあつてますが……。

小説だから良いよね（おい！

7話 ベンチ（前書き）

書き方をちょっと変えてみたので、読みづらかったらごめんなさい。

7話 ベンチ

「うう……きもちわるいい……」

こんな感じから始まるのってどうかと思うけど……。
とにかく、今は気持ちが悪い。

楽しい曲が流れている最中で私はベンチに背を預けてぐったりしている。

どうしてこうなったって？

それは私が絶叫系を嫌いだと思い出して欲しい。

一番最初に向かった場所こそ私がぐったりした原因。

言っても恐ろしい絶叫アトラクション。いわゆるジェットコースターである。

ここの遊園地の売りは、他の遊園地よりも乗車時間が長い事。

他には落ちる所が5箇所あり、きゃーと言う可愛らしいものではなく、ぎゃーと言う濁音混じりの叫び声が聞こえるという有名なジェットコースタなのだ。

私としては、もっとも近寄りたくない場所なのに、それを五回も乗らされれば、誰だって気分が気持ち悪くなっても仕方が無い。
なんだって胃とかいろいろな物がかき回されたような感じだ。
まったくもって耐えられたものじゃない。

「大丈夫か？」

声をした方に顔を向けると、紙コップを持った伊達くんがいた。

「まだ、ちょっと気分悪いや。あはは」

「そう」

相槌を打った伊達くんは私のとなりに座り、紙コップを私に差し出した。

なんだろうと思い、髪コップを見つみれば伊達くんが、

「ウーロン茶。水分取ったほうがいいと思って」

それから微動だにしないものだから私は仕方なく受け取る。

「あっありがとう。あっお金」

「いいよ。別に」

ぶっきら棒に言われてしまった。

そう言われてはなんだか渡しづらい。

「でも……こないだのジュース代もあるし、ちょっと待ってて!!」

鞆から財布を取り出そうとしたが手首を捕まれた。

「別にいいから……」

「でっでも」

「いいから、こないだのも返すなよ」

「でも悪いし……」と言い返そうかと思ったが、声が出せなかった。なんか有無を言わせないように、見つめられたからだ。仕方なく貰ったウーロン茶を飲む。

冷たくて美味しい。

「ありがとう」

「いや、俺が勝手にやったことなんだから気にすんな」

「……うん。でもありがとう」

ここは素直に気持ちを伝えておこうと、微笑んでお礼を述べた。
伊達くんも釣られたのか、表情が柔らかくなった気がした。

だいぶ気分も落ち着いた頃に、不意に違和感を覚える。元凶のアイツと美穂ちゃんがない。
辺りを見回しても、家族連れやカップルなどが行き合っているだけで見当たらない。

もとはと言えばアイツ……、田辺が絶叫系に有無を言わせず乗らせられ、連れまわされたせいなのに。
事情を知ってそうな伊達くんに聞くのがいいだろう。

「あの……伊達くん。美穂ちゃん達は？」

「ああ。皆、山野を心配してここに居ただけど、俺見てるから行つてきなつて言つたからたぶん、大和の事だから絶叫系でも乗ってるんじゃないか」

「へえ、そう」

とりあえず頷いておく。

あんだだけ乗つといてまだ乗る精神がすごいわつと関心した。

これで居ない理由も納得はしたが、でもなぜ伊達くんが私の世話役に買つて出たんだろう。

疑問が浮かび怪訝したが、その視線に気が付いたのか伊達くんは笑つて、

「絶叫系は普通だけどあんまり連続で乗るのは俺もキツイって伝え

「だから」

「でも伊達くん。わりと涼しい顔してなかった？」

「そんなことないよ。連続はきたな」

「そうかな？」

「そうだよ」

そのわりに私を介抱してくれる体力はあったってことよね。
うーん。羨ましいような気がする。

「あと大和から連れまわしてごめんだって、まあ今本人居ないけど。
渋々俺が行かせたからカンベンな」

「そうなの？ああ、時間とかあるもんね。」

「ああ……それもあるけど……」

急にそっぽ向く伊達くん。

何かあったんだろうか。

（もしかして、私と居たかっただけだったりして……ってそんなことあるわけないじゃん）

変な考えが頭に過ぎったが片手で追い払う。

伊達くんが感心した声で、

「ああ見えて五嶋さんが絶叫系大丈夫なのは関心したけどなあ」

「そうね。あれで強いのでびっくりするわよね」

うんうんと頷きあう二人だった。

ウーロン茶も飲み終わったし、気分もすっかり晴れた。
たぶん激しい乗り物意外なら大丈夫だろう。

「そろそろ行くか」

「うん。でもあの二人は？」

「しばらく絶叫乗るって言ってたからなあ。乗り飽きたら山野にメルするって言ってたぞ」

「あれ？伊達くんのは？」

「二人とも知らん。特に大和は教えたくない」

「はあそう」

伊達くんは変わらない表情で言われたが声のトーンが1つくらい下がっていたので、過去に何かあったのだろう。なにかは触れないでおくとして……。

「行ってみたいところがあるんだけどいいか？」

「どこ？」

「ミラーハウス。でかくて面白いらしいから気になって」

「ミラーハウスか……」

ちよつと考え込んだが乗り物ではないし、建物だからきつと平気だろう。

「いいよ。行こうか」

「ああ」

嬉しかったのか、伊達くんの口元が綻んでいる。まあこんなのもいいかなって私も笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9903s/>

ニガテを越えて

2011年8月24日12時31分発行